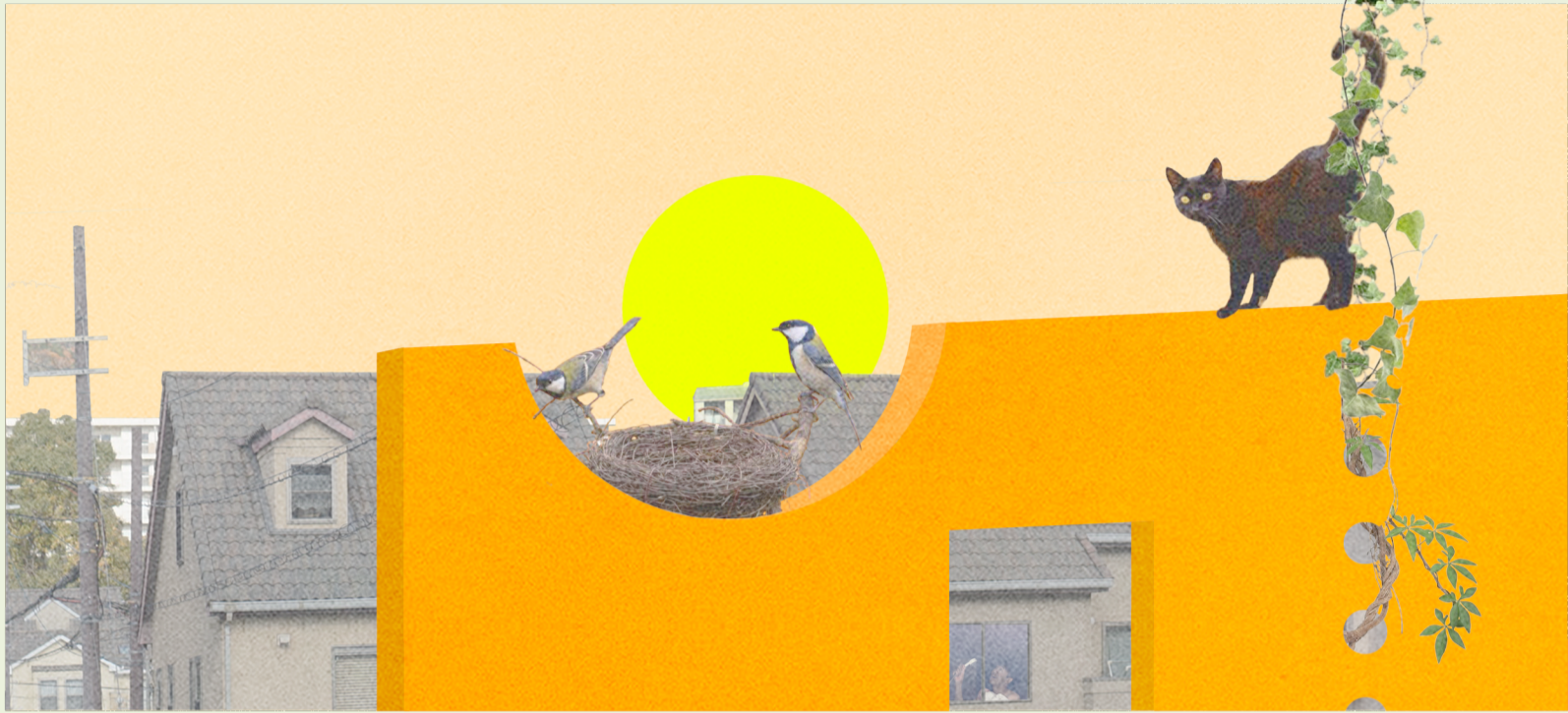


M o v i n g **A** R T



神戸とはどんなまちだろうか。
青い海のある港まち、異国情緒のあるまち、緑豊かな坂の多いまち。
ミュージアムロードは、そんな神戸の記憶を縦につないでいる。
しかし、今のこの道は、そんな記憶を流して「目的地へ向かうためだけの通り」になってはいないだろうか。
私の暮らしていた北欧では、人々は身の回りにあるものを受け入れ、活かしながら自然と日常を編んでいた。
特別なルールはなく、できることを見つけ、できるかたちで使う。
その積み重ねが、日々異なる風景を生み出していた。



本提案は、この通りを高齢化がさらに進むこれからの20年を見据え、人が歩き、立ち止まり、関わることで、心も身体も健康になっていく日常をアートとして受け止める環境「歩くこと自体が楽しい体験となる街の記憶を宿したストリートギャラリー」を構想する。

通りに立つ「フレーム」は、日常の着眼点を少しずらす装置となる。
それは額縁であり、家具であり、遊具であって、アートである。
風景を切り取り、アートを支え、植物が絡み、鳥がとまり、人が腰をかけ、買い物をし、子どもがよじ登る。
展示、植物、動物、季節、時間、そして人。
それらが重なり合う一瞬一瞬が、この道だけの風景をつくり出す。



この道に完成はない。
 今切り取られている景色は、数分後、数時間後、数年後には異なる表情へと移り変わっていく。
 時間と記憶を重ねながら、街とともに成熟していく新しい神戸の魅力である。

歩くたびに視点が少しずれ、日常が少し色づく。
 風景やアートを「見る」ことと、人の振る舞いや佇まいが誰かの風景として「見られる」こと。
 その重なりが通りをかたちづくり、何気ない存在が一日を彩るものであると気づくための、ひとつのきっかけとして。

さあ、この道で何を見つけよう